

朽木陣屋跡

朽木野尻に位置する朽木陣屋跡は、近江源氏佐々木氏の一族で中世・近世をとおして朽木谷一帯を支配した朽木氏が、江戸時代に本拠とした城館跡であるといわれています。

朽木氏は、都と日本海を結ぶ若狭街道沿いに拠点をもち、朽木庄内の豊富な農地や河川の管理などを通して力を蓄えていきました。室町幕府の中では、都に近い立地と軍事力などの面で重用され、幕府の奉公衆として將軍の親衛隊的な役割も担っていました。

元亀元年（一五七〇）、織田信長の越前朝倉氏攻めの際には、浅井氏の裏切りによって退路を断たれた信長が朽木氏の手配によって無事若狭街道から京へ逃れたというエピソードも知られています。

また江戸時代には、九千石を与えられ、旗本でありながら老中支配の交代寄合として参勤交代を務めるなど、大名の格式を備えていました。

朽木陣屋跡は方2町の規模をもち、内部には御殿や馬場が設けられていたといいますが、明治維新に建物は取り壊され、現在では堀や土塁、石垣の一部が見えるだけになっています。

近年行われた発掘調査では、堀や橋や道などの遺構が確認され、出土遺物から、これらが室町時代の朽木氏の城跡である可能性も推測されています。

現在、朽木陣屋跡には古井戸や石垣の一部などが残り、一画には萱葺きの民家が移築されています。また敷地内の朽木資料館には、朽木の歴史、文化を伝える貴重な文化財が数多く展示されています。

（文化財課）



朽木陣屋跡の現在の様子

高島に築かれた織田一族の城

JR 近江高島駅の東側、公立高島病院の東手付近には、大溝城天守台のものと伝えられる石垣が残っています。石垣は天正6年（1578）の大溝城築城のときに積まれたものとされ、この時代の工法をよく伝えるものとして、現在、市の指定文化財となっています。



大溝城跡

大溝城は、全国統一を目指した織田信長が、琵琶湖の東岸に壮大な安土城を築いた後、対岸である高島の地にも城を築かせ、甥の織田信澄を城主としたものです。城は琵琶湖と内湖（乙女ヶ池）を取り込んだ水城で、天守台を中心に本丸、二の丸、三の丸からなっていたと考えられています。また東と南、北の三方には武家屋敷が配され、さらにその西と北の外に城下町が広がっていたようです。

城主織田信澄は、信長の弟信行の嫡男で、父信行が領地横領の罪で信長に謀殺された後、織田家の家臣柴田勝家の元で養育されました。当時、湖西一円を支配していた磯野員昌の養子となり、天正6年に員昌が出奔すると、その跡地である高島郡の支配権を与えられ、大溝城築城とともに、それまでの

大溝城

新庄城（新旭町）から大溝城に本拠を移したようです。

しかし、天正10年6月、明智光秀が織田信長を倒すという本能寺の変が勃発し、光秀の娘婿であった信澄は、光秀に呼応することを恐れた信長の三男信孝に襲撃され、大坂城で自害しました。

高島町教育委員会が昭和58年（1983）に行なった調査では、本丸跡から安土城の瓦と同型の瓦が出土し、大溝城が織田一門の城として築かれたことが改めて確認されました。



大溝城下古図

（文化財課）

編集後記



畑の棚田で棚田オーナーによる稲刈りが行われました。（9月18日）

▼〇〇の秋。と聞いて一番最初に頭に浮かぶ秋は何ですか。実りの秋、文化・芸術の秋、読書の秋、スポーツの秋など、秋には沢山の冠が付きますが、僕は迷わず食欲の秋！畑の棚田で刈り入れられた稲穂を見て思わずだれが…。新米はもちろんのこと、芋に蕎麦、栗に柿やびわ、鱒など高島には秋の味覚が沢山あります。旬の実りを美味しくいただいて、収穫に携わってくださっている皆さんに感謝したいものです。▼残暑も終わり過ぎやすい季節。市内では様々なイベントが開催されています。合併して初めての秋、今まで行ったことのないお隣のイベントをちょっと覗いてみませんか。文化祭に運動会、収穫のお祭りなどが10月は目白押し（4.5頁参照）。どのイベントも特徴のある取り組みやその地域ならではの工夫がなされています。沢山の人が参加されて、出会いと触れ合いから新しい繋がりが出来ていくと素敵ですよ。みなさんの〇〇の秋、目一杯、楽しんでください。

（広報担当）

高島市 歴史散歩

No.21

田中城跡と田中吉政

安曇川町田中の上寺地区の裏山に所在する田中城跡は、古くから「上寺城」・「上ノ城」などと称され、現在も多くの曲輪跡、土塁、堀跡などが良好な状態で残っている中世山城跡の一つとして知られています。この田中城跡の位置には、もともと「高島七力寺」の一つで松蓋寺と呼ばれる天台寺院が存在しており、城はその寺院遺構を一部使用する形で建てられたようです。

田中城がいつごろ築造されたのかは定かではありませんが、織田信長の経歴を記した『信長公記』には、元龜元年（1570）、越前の朝倉義景攻略のため、湖西を北上して若狭から敦賀へ向かっていた信長が、「高島の田中の城」に泊まったという記述があり、

り、この「田中の城」が田中城のことであると推定されています。

田中城の城主と考えられているのは田中氏で、その一族では織田・豊臣・徳川に仕えた戦国武将・田中吉政の存在が知られています。吉政は『徳川十五代史』をはじめ、種々の資料で高島郡田中の出身と伝えられており、初めは母の出身地の関係で織田信長の配下である湖北の宮部氏に仕え、中国攻め等に参加しています。その後、秀吉の命で、秀吉の後継者とされたおいの豊臣秀次の重臣となり、秀次の領地である近江八幡の町づくりに尽力しました。秀次の死後は秀吉に仕え、天正16年（1588）三河国岡崎城を与えられ、さらに関ヶ原の合戦では東軍（徳川方）

について働き、慶長6年（1601）には筑後国32万石の領主として柳川城に入りました。ここでは筑後川の水路工事を始めとする土木工事や有明海沿岸の干拓による新田開発などに手腕を発揮したと伝えられています。

（文化財課）



田中城跡に建つ松蓋寺観音堂



編集後記

ゆっくり、じっくり高島の豊かな自然に育まれ、たわわに実った稲穂が頭を垂れます。
（今津町日置前にて）

▼空に届けとばかりに葉を広げていた稲も、いつの間にか頭を垂れ、季節の移りを知らせてくれます。この季節、貫けるような青空と黄金色に輝く稲穂、真っ赤な彼岸花が高島の豊かな自然を描きます。▼今月の表紙は、7月27日から30日までの4日間、藤樹の里文化芸術会館で行われた「キッズゲルニカ in 高島」の様子をご紹介します。平和を願いピカソが描いた「ゲルニカ」（1937年制作）と同じサイズ（35m×7.8m）のキャンバスに、平和をイメージした絵を子どもたちが描くというプロジェクトに、市内外から約60人の小・中・高校生が参加しました。用意された絵の具は赤、青、黄色の三原色のみ。しかしこの3色は、子どもたちのイマジネーションにより様々な色となつて筆先から吹き出し、真っ白な巨大キャンバスを彩ります。できあがった作品を見ると、まずその迫力に圧倒され、そしてその豊かな表現力と創造力を見るものに感動を与えてくれます。一枚の大きな絵を完成させるというプロセスを通じて、子どもたちは何を学び、何を得たかと私たちはつい性急に成果を求めがちですが、子どもたちの心の中で芽吹いた種をゆっくりと育ててあげる。そんな気持ちを持ちたいものです。

（広報担当〇）

歴史散歩

No.31

四海太平記と朽木種綱

日本文学のジャンルに軍記物といわれるものがあります。よく知られるものとして「平家物語」「義経記」などがあります。が、「太平記」以降は足利政権下での権力闘争をめぐる作品が多くなり、物語性よりも記録性に重きが置かれるようになったといわれています。



▲朽木（針畑）で発見された四海太平記

今回ご紹介する「四海太平記」は、昨年、朽木地区針畑の旧家を調査中に発見したもので、江戸時代の正徳5年（1715年）に初版本が京都の大和屋と江戸の須原屋から発行され、文政6年（1823年）の再版は河内屋が行っています。作者は佐々

興義範という人物で、全15巻に目録1巻がついて16冊で構成されています。この本は、現在のところ国立国会図書館の他全国7か所に所在が確認されているだけで、その存在を知る人は学者間でも数少ないようです。したがって針畑での発見は特筆する価値があるといえるでしょう。

次にこの本の内容ですが、時代は室町中後期、つまり戦国時代（1467～1568年）と呼ばれた100年間の舞台に、室町將軍職の相継ぎいとそれに関わった大名たちの権力闘争を、史実と創作をとり混ぜて生々しく描写しています。

物語は、近江守護家の佐々木六角高綱・氏綱・定綱・義興（義久）を主役として、仇役には細川政元・大内義興・細川高国・細川晴元・三好長慶を、脇役には山内・一色・赤松・山名・毛利・朝倉・島津らの大名や京極・大原・高橋・浅井らの近江源氏に連なる武将を配することで、廣



▲目録

場感を増幅させ、記録性を高めています。

とりわけ、脇役たちの中で最も多く登場し、場面展開のキー・パーソンとして活躍するのが朽木家第14代目当主の朽木種綱です。また、12代將軍足利義晴が享禄元年（1528年）から3年間、京都での戦乱を避けて朽木谷に滞在したという史実を下敷きとして語られる、朽木城攻防戦の場面は圧巻といえます。

次号から2回の予定で、口語訳による鑑賞を掲載いたします。どうぞ、お楽しみに。

（朽木村史編さん室）

編集後記



は、は、はたる来い。高島の水は甘いかな？
（マキノ町で）

▼飛び交うホタルと川面を渡る風が、梅雨でじめじめとつつしうしい気分を晴らせてくれます。身近に、こんな環境があることは本当に幸せです。▼今月の表紙は、県内の小学校で唯一、授業に力を入れているマキノ東小学校の自然教室の様子をご紹介します。6月5日から7日までの3日間で豊後川西岸70kmを力一で縦断。2チームが、2、3kmごとに交替しながら大津の柳が崎を目指します。5日朝8時、たくさんの方々に見送られ海津を出発。浜辺からはチャレンジャーする子どもたちに声援が、また、中継点では地域の方もサポートに加わります。地域の懐に抱かれ育つ子どもたちの姿を目の当たりにし、仕合せを感じました。

（企画担当）

朽木城の軍勢強し！

今回は前月号で紹介しました「四
海太平記」から、巻第十四下の「晴
元、兵を率いて朽木を攻める」の前
半をご紹介します。

享徳元年（1528年）12代将軍足利義晴は、堺公方足利義雄を支持する細川晴元や三好一族の軍勢が京の都に迫つたため、佐々木六角定頼を頼つて近江の坂本（大津市）へ逃れ、さらに朽木種綱のもとへ避難してきまつた。義雄を支持する細川高国や他の武将たちの軍勢に挟み打ちになりそうな状況を察した細川晴元は、兵4万余騎を集めて朽木の城へ攻めてきまつた。

「晴元、兵を率いて朽木を攻める」
付・大杉落城の事

(前略)ところで、この朽木城といふのは、北に山が險しくそびえ立ち、万木千草が生い茂り、左右に二つの川が合流して城の東西をはさみ、そこへ通じる道は奇岩怪石の間に羊の躰のごとくに曲がりくねつてゐる。



南側だけが平地で城下の田野が開けています。このような地形ですからたとえ数万騎の軍勢で攻撃したとしても簡単に陥とせる城には見えません。

しかし、4万の大軍である陣元や三好の軍勢は城の構えを甘くみて、

一氣に取め落すと、三方の坂口より叫びながら押し寄せてきました。城の兵たちは物音を立てずに待ちかまえていて、予定どおり敵の先兵が切岸（人工のがけ）に近づいた時、合図の太鼓を打ち鳴らすやいなや、周囲の兵數千人が手ごろな石を次々と投げ落してきたので、敵兵三百人余りが死亡しました。そこへ城からは八百余騎が3つの木戸より打って出て、四方八方に切つてまわつたので、敵兵は一戦も交えずに敵隊に勝たれて、市邊・岩神（岩瀬）あたりまで、羣衆のごとく引き退きました。その日の合戦で、城兵の討死はわずかに20騎だけでしたが、敵方の石に打たれたり矢に当たつて命を落す者は八百人余りと記録されました。少數の兵に負けてしまった大軍の方は、勇気をなくしてしまつたように見えました。（中略）

6月晦に終へ。

(朽木村史編さん室)

總集後記



「ゴォー」という音が、暑さをも忘れさせてくれます。
(「ハツ洲の魔」で)

▼シリシリと照りつける太陽。暑さに負けて、冷房のスイッチを「バツ」と押すよりも、大樹の木陰にそよぐ風や滝の轟音など、高島にある自然の涼を羨しみまはんか。▼「水泳・自転車・マラソン」3つの種目を1人でこなすトライアスロン。今月の表紙は、7月1日(日)に高島地域で行われた「2007びわこトライアスロン」&ちびっこチャレンジin高島」の様子を、紹介しています。合併によって大人と子どもが一緒に参加できるようになったこの大会、「ちびっこチャレンジ」には、2世アスリートが出場するなど、親子で参加できる大会になりました。ゴールに飛び込んでくる選手は、とても3つの種目をこなしてきたとは思えないほど、すがすがしい表情をされています。それば子どもたちも同じです。達成感に満ち溢れた選手、完走を祈る家族や仲間。ゴールでは、いろんなドラマが垣間見られ、感動のおすそ分けをいただきました。

(大塚誠三氏)

歴史散歩

No.33

「四海太平記」シリーズ③
しんがたいへいき

高島勢が協力し、大軍を撃退！

今回は前月号に引き続き、四海太平記第十四下から当番のクライマックスといえる場面をご紹介します。

「市瀬、野尻で大いに戦つて」

付：朝倉が援兵にきた事

細川晴元が朽木を攻撃したことが、桐生城（佐々木・六角氏の居城、滋賀県安土の「桐生寺」）に伝わったので、佐々木義実（義興行の市瀬玄蕃允兼）に、急いで北郡の兵をひきいて朽木へ向かい、敵兵を討つように命じたので、たちまち平井・高嶋・大野木・新庄をはじめ江北（湖北地方、江西（湖西地方）の兵7千騎余りが集まって、その日の午後3時には朽木の北にあたる野尻に到着しました。晴元はこれを知り、この軍勢が朽木の城に近づけば、朽木・横山（佐々木の同族）の軍勢は朽木を聞いて打って出てくるのは確実であり、挟み打ちになる前に自分の方から先手をうって攻撃しようと考えました。そこで、三好長基に百千余騎をそえて

城兵の押さえとし、羽床兵部少輔に3千余騎を与えて本陣を守らせ、自分は3万余騎を率い、朽木の西北をまわって麻生村に進出しました。翌日、敵味方4万余騎が関の声をあげ、矢叫びの音を谷にひびかせて、両陣が互いに入り乱れて戦いました。その日の合戦に、江州（滋賀県）方は打ちとった首2千余を麻生村に切りなげて、敵をあざむくようにしました。晴元はかんかんに怒って、敵を討つまではこの陣を絶対に引かぬといひ、なお残兵を集めて、ふたたび野尻の西まで打って出ました。そのころ、越州（福井県）の国主・朝倉孝景は將軍の危機を聞きつけ、援軍としてかけつけると、関の声を上げて晴元軍に攻めかかりました。晴元の兵は同日の戦に疲れているところを、新軍の軍勢に攻撃されたので、朽木に留まることができず、針畑・途中を通って京都まで逃げて帰りました（下略）。

なお、「四海太平記」の当番は、この後「勅使朽木に下向の事」を記して終了しますが、この他にも当地にゆかりのある高嶋・田中・横山・平井・新庄・磯野などの諸将が登場する巻もあります。興味を持たれた方は朽木村史編さん室をお訪ねください。

■ 朽木村史編さん室

（朽木やまびこ館内）

☎0820224



高島勢が集結した朽木野尻の朽木城（朽木陣跡）。現在は、朽木グランド・郷土資料館・森林組合の敷地になっています。

編集後記



「ドン」「ドン」「な～まや～」
（「近江今津
ふるさとまつり」で）

▼晴りに、太鼓に、夜店、そして花火。夏はやっぱり祭りですね。「祭り」と聞いただけで、何だか胸がワクワクします。祭りが終ると収穫の秋ですね。田んぼの稲も黄金色に色づき、田舎を飾りながら、まだかまだかと秋風に揺れています。▼今月の表紙は、7月24日（日）安曇川町泰山寺にある「風花の丘」で行われた「キッズキッチン」の様子をご紹介します。畑で採ってきた野菜を子どもたちが料理。「あっ、危ない」「気をつけて」。そんな言葉が口から出そうです。でも、最初から最後まで全部をやり遂げた瞬間に子どもは大きく成長するんです。そして、それを見届けた大人も、この胸のドキドキは、成長の階段を上っている足音なのかもしれません。▼平成17年1月10日に創刊号を発した「広報たかしま」も、今号で50号を迎えました。皆さんにより親しまれる広報誌になるよう、これからも努力してまいります。何かお気づきの点などございましたら、お気軽に編集広報課までお寄せください。

（広報担当）

歴史散歩

No.44

関ヶ原の戦い 朽木元綱の決断

豊臣秀吉の死後、徳川家康は五太老の筆頭として政權を左右する位置につきました。その一方で、五奉行の一人である石田三成らとの対立を深めていきました。両者の溝は次第に深くなり、ついに戦になりました。

慶長5年(1600年)9月15日午前8時、家康率いる東軍9万人と三成率いる西軍8万人が、美濃(岐阜県)の関ヶ原で、秀吉没後の主導権をかけて衝突しました。午前中、東西両軍は互角の戦いを展開していましたが、正午過ぎになって西軍の小早川秀秋および他の4大名2万人の軍勢が東軍に裏返ったことで、西軍は敗れました。

この戦いには、朽木家16代目当主の元綱に率いられた朽木の軍勢600人も参加していました。はじめ、元綱は三成に味方した大谷吉継に従って北陸道を加賀(石川県)へ向けて進軍し、一度、敦賀へ戻ってから湖北の木之本・長浜を経由した後、9月2日に関ヶ原に到着したとされます。しかし、安曇川町船木には、関ヶ原へ向かう朽木の軍勢を舟で長浜

港まで送ったという

言い伝えがあり、長浜から米原市野一色に渡る船は、「関ヶ原合戦」に向かう朽木の軍勢が通ったことから「朽木街道」と名づけられたと語られています。

おそらく本隊とは別行動の部隊があったものと思われる。

さて、この戦いの勝敗の鍵は、関ヶ原の南西にある松尾山に陣取った小早川秀秋隊1万5,600人が据っていましたが、秀秋の東軍への裏返りを心配した大谷吉継は、小早川隊を監視するために朽木元綱・藤坂安治・小川祐忠・赤座直保の軍勢4,200人を松尾山の麓に配置していました。正午ごろになって、家康から裏返りの催促を受けた秀秋は、松尾山を下ると麓にいた朽木・藤坂・小川・赤座らの軍勢とともに大谷隊を攻撃しました。大谷隊が崩れ出したのをきっかけに、宇喜多秀家・小西行長らの西軍主力部隊が敗れ、三成の本隊も敗走し、午後2時ごろには東軍の



長浜市「朽木街道」



合戦時の本陣に掲げた朽木家扇印

勝利が決定しました。その日の夜、細川忠興を頼って家康に面会した元綱は、本領9,595石を安堵されると、17日には三成の居城である佐和山城の攻撃にも参加しました。

ところで、元綱の裏返りについては、勝軍高虎を通じて早くから約束されていたことであるという説と、戦いのなかばで初めて家康に書を送って約束したために、2万石から減封されたという説があります。

「関ヶ原の戦い」直前の元綱の所領を2万石とする書物がありますが、元綱は文禄4年(1595年)に秀吉からも高島郡9,203石2斗を安堵されており、その内訳は戦いの後に家康から安堵された地所とほぼ同じになっています。したがって、元綱の裏返りは前説が正しく、朽木家の系譜がいうように「旧領はそのまま下し置かれた」というのが事実と思われる。

(朽木村史編さん室)

編集後記



菜園には、太陽の恵み、たわわ。

▼今年は、オリンピックイヤー。8月8日からは、17日間の熱い戦いが北京で繰り広げられます。第1回のアテネ大会で8競技30種目だった競技数は、今大会では28競技302種目に。今月の表紙は、朽木中学校びわ湖遠泳の様子をご紹介します。遠泳(10キロマラソン水泳)も今回の種目にはあるとが、オリンピックの競技も多彩ですね。▼子どもの頃は、あんなに持ち運ばなかった夏休みも、親となった今は2学期の始業式を指折り数えます。夏休みで、子どもたちの活動の場は学校から地域へ。大人たちの気持ちとは裏腹に、暑さにもめげず毎日飛び回っています。子どもたちの夏休みもこれから本番。子どもたちが安全で、安心して地域で過ごせるよう、地域の皆さんの見守りをお願いします。

(広瀬浩三)



- お知らせ 拡大版
- タウン トピックス
- 暮らしの情報
- みんなの 575
- 消費生活 省エネ長者
- 教育委員会
- 健康生活
- びょういん だより
- 国保年金
- 図書館
- 窓口だより
- 歴史散歩

近江大溝藩と

若狭小浜藩

高島市内（旧高島郡）における江戸時代の幕藩体制は、入り組み支配（※）の様相を呈しています。ちなみに挙げますと、金沢藩・伯太藩・堅田藩・郡山藩・敦賀藩・朽木藩・小浜藩・大溝藩・直轄領などです。

若狭小浜藩は、若狭遠敷郡に置かれた藩で、十萬三千石の譜代大名です。藩主は酒井氏で、高島郡内に、梅原村・三谷村・伊井村・構平ヶ崎村・木津村・米井村・辻沢村・下吉武村・安養寺村・河原市村・井口村・



▲日枝神社（南船木）

船木村・拜戸村・野田村・上古賀村等を領地としていました。船木村では、日枝神社に対して、正保3年（1646）8月に酒井忠勝公が上尊（※）を命じて社領（神社の領地）二石五斗を寄附していません。

一方、近江大溝藩は、元和5年（1619）伊勢上野（現三重県津市）から近江大溝へ二万石の藩主として分部光信公が入府（※）しました。以後、高島郡内の・大溝村・打下村・石垣村を始め32ヶ村と野洲郡内の矢嶋村・小嶋村・今濱村を含めた5ヶ村を領地としていました。

小浜藩も大溝藩も二百数十年続いた江戸時代全般を渡って藩政が続ぎ、明治維新以後は版籍奉還をして、長きに渡る藩の歴史に幕を引きました。そこには、数々の歴史が刻まれています。

福井県の小浜市にある福井県立若狭歴史民俗資料館と高島歴史民俗資料館では、この秋に次の展覧会が開催されます。

編集後記

今年の9月は、敬老の日を挟んで大型連休が出現しました。春のゴールデンウィークに対してシルバーウィークと呼ばれるこの連休。シルバーと敬老をかけたとか、そうでないとか。9月1日現在、市内の100歳以上の方は27人で、最高齢者は明治37年生まれの上田ふじさん105歳。皆さんの健康と長寿にあやかりたいものです。明治37年と言えば朝日新聞の「天声人語」が誕生した年でもあります。折しも「広報たかしま」は今号で100号を迎えました。100の縁にあやかり、未永く皆さんに親しまれる広報誌づくりにも今後も努めてまいります。お気づきの点などございましたら、お気軽に秘書広報課までお寄せください。

（広報担当〇）



▲分部神社（勝野）

※入り組み支配・・・互いに組み合った複雑な支配形態
※上尊・・・屋根など葺いてある上にさらに葺くこと
※入府・・・領主などが初めて領地に入ること

若狭歴史民俗資料館

0770(56)0525

◆展示「特別展 若狭小浜藩」
「大老酒井忠勝とその家臣団」

▼会期

10月17日（土）～11月15日（日）

◆記念講演

「人・酒井忠勝」

「幕府と藩とのはざまで」

▼講師 藤井譲治先生

（京都大学文学研究科教授）

▼日時

10月25日（日）13時30分～15時

高島歴史民俗資料館

0770(15)5153

◆展示「近江大溝藩 分部家展」

▼会期

11月3日（火）～29日（日）

（ただし、月・火 休館）

（文化財課 高島歴史民俗資料館）



大溝城

その過去・現在・未来

大溝城は、織田信長が、天下統一を目指す過程の中で安土に居城を構えたとき、その対岸にあたる高島支配の拠点として築かれた城で、甥の織田信澄が、天正6年（1578年）に入城し城主となりました。

織田信澄は、織田信長の弟である信行の息子で、父の信行が知行地（領地）横領の罪で信長に謀殺されたため遺児となり、織田家の重臣である柴田勝家に養育されました。その後、信澄は高島一円を支配していた磯野員昌の養子となりますが、天正6年に員昌が信長の怒りをかい、姿をくらましたため、高島の支配権を与えられ、大溝城築城とともにそれまでの居城であった新庄城（新旭町新庄）から大溝城に本拠を移しました。

大溝は、京と北陸諸国を結ぶ西近江路が通る要所だけでなく、古代より勝野津として知られる港が存在するように、まさに陸路と水路が交わる交通の要衝であったと考えられます。

高島支配の拠点として大溝に城を構えた理由の一つには、織田信長が琵琶湖の水運を重要視していたことがあげられます。近江には、織田信長の安土城・織田信澄の大溝城・羽柴秀吉の長浜城・明智光秀の坂本城など琵琶湖に面して築かれた水城が存在します。信長は、これらの城を結ぶ湖上ネットワークにより、琵琶湖の支配権を掌握すること

ができました。大溝城は、その一端を担っていた重要な城でありました。

大溝城の城主に織田一族の信澄を起用したのも、安土城が京と東国を結ぶ拠点であるのに対し、大溝城が京と北陸諸国を結ぶ拠点的な城郭として非常に重要視されていたからではないかと考えられています。高島町教育委員会が、昭和58年に行った発掘調査の結果、本丸跡から安土城と同型と考えられる軒丸瓦が出土しました。織田信長の居城であった安土城と同型の瓦が出土したことからも、大溝城が織田一族の城として重要視されていたことが分かります。織田信澄が築城した大溝城の全貌は明らかではありませんが、現在でも天守台跡と考えられる石垣が洞海（乙女が池）に隣接して残っていることから、琵琶湖や内湖を巧みに利用した水城であり、琵琶湖の湖上支配を重要視して築城されたことが現在の姿からもうかがえます。

大溝城については、まだまだ分からないことが多いですが、今回、「大溝城―その過去・現在・未来―」をテーマに、大溝城周辺の歴史や、大溝城下町、乙女が池をはじめとする大溝地域の景観を学習しながら、大溝城の未来の姿について考えるフォーラムを開催します。大溝城の過去・現在そして、未来について考える歴史の旅に皆さんも参加してみませんか。

大溝城フォーラム

○基調報告

- I 「大溝城と歴史遺産」
林 博通さん（滋賀県立大学教授）
- II 「大溝城の現状と発掘成果」
白井 忠雄（高島歴史民俗資料館）
- III 「大溝城遺跡周辺の水辺景観」
山岸 常人さん
（京都大学大学院工学研究科准教授）

○公開討論会

- 「大溝城―その過去・現在・未来―」
コーディネーター
中島 誠一さん
（長浜城歴史博物館館長）

・パネリスト

- 林 博通さん・山岸 常人さん
白井 忠雄

- ▼日時 3月6日（土）
13時～16時50分
- ▼場所 ガリバーホール
- ▼定員 300人（先着申込順）
- ▼申込方法 電話・ファックス
- ▼申込期間 3月5日（金）まで
- ▼参加料 500円（資料代含む）

「フォーラム特別企画」

大溝城 歴史探訪

- ▼日時 3月6日（土）
10時～12時40分
- ▼場所 大溝城周辺の散策
- ▼定員 50人（先着申込順）
- ▼申込方法 電話
- ▼申込期間 2月1日（月）～26日（金）
- ▼参加料 1,000円（昼食代）
- ★雨天決行します。
- 図・国 高島市教育委員会文化財課
☎（32）4467 ☎（32）3568



▲大溝城天守台跡

編集後記

12か月の音をイメージした「音の歳時記（那珂太郎）」という詩が、新聞で紹介されていました。それによると、2月の音は「びしり」で、春が兆して氷が割れる音とのこと。高島でいうと、ザゼンソウが雪を溶かし顔を出すときの音といったところでしょうか。先日、ザゼンソウが開花したとの知らせが届きました。今年は例年より10日ほど早いそうです。過去の新聞を読み返しても、このところは「早い開花」の方が多くなっています。これまで「たまたま」であったことが「たびたび」となると、もはやそれが普通になってしまいます。「びしり」という音のイメージが普通である。そんな環境でありたいものです。

（広報担当〇）

全国的に貴重な鎌倉・戦国時代の文書群

朽木文書

朽木文書とは、鎌倉時代以来、明治維新に至るまで朽木谷の領主であった朽木家に伝わった古文書・典籍のこととをいいます。

朽木家は、鎌倉時代以来、現在に至るまで、連綿と朽木の地にある家で、鎌倉時代においては鎌倉幕府の御家人として、室町時代においては室町幕府の御家人として、本貫（出身）地近江国朽木荘を拠点に、領主支配を展開しました。さらに、戦国時代、織田・豊臣期を生き延び、江戸時代においては参勤交代をする旗本（交代寄合）として、朽木の地を動くことなく明治維新を迎えました。中世から近世にかけて一貫

して同一地に存在し続けた領主としては、全国的に稀な存在です。

また、本貫地を動かなかったというだけでなく、鎌倉時代以来明治時代に至るまで、多量の家に伝わる古文書を残しています。全国的には多くの家が南北朝時代から戦国時代に起こった幾度もの戦乱で家が断絶したり、織田・豊臣期や江戸時代において、他の地へ転封させられた家も多く、転封の際に古文書が散りうることがよくありました。朽木氏の場合、数々の戦乱を生き抜き、本貫地を離れず、古文書の価値を幾度となく再認識し伝えてきたことにより、多くの古文書を今日に残す

ことができました。とくに鎌倉から戦国時代にかけての中世文書は、畿内・近国に居住した領主層の残した古文書群としては唯一の質と量を誇ります。そのため多くの研究者の注目を浴び、研究がされてきた結果、朽木氏の存在形態が畿内・近国の現地に居住する領主像の一つの典型として評価されています。

朽木文書の総点数は、約1,500点です。その多くが鎌倉・室町・戦国の各時代にあたる中世の文書です。中世の武家の文書がまとまって残っているところに、その特徴があります。

朽木文書の残存した大きな理由の一つは、戦国時代から織田・豊臣期に生き残ったことです。湖西地方の武家領主のほとんどが、織田信長との戦いの過程で滅び去ったために、家の古文書も残ることはありませんでした。

また、近世になるとほとんどの大名が、天下人であった豊臣秀吉や徳川将軍家

の命令により、古くから住んでいた土地を離れ、新しく命じられた土地に移らなければなりません。このような大勢のなか、朽木氏は一度も朽木の地を動くことなく明治維新を迎えたのです。

明治21年に朽木家の中世文書の大部分が売却され、内閣記録局が所蔵しました。この「朽木家古文書」1,066通は、その後、畿内・近国のまとまった中世文書として、全国的にも貴重であることから、平成元年に国の重要文化財に指定されました。

また、現在朽木家が所蔵する史料としては中世文書を中心とする427点があり、平成20年に高島市の有形文化財として指定されました。この史料は、本来、重要文化財である国立公文書館所蔵分とひとまとまりになるべきもので、伝来の過程で二つに分けられてしまったのです。

（朽木村史編さん室）



朽木家に残る文書

文書を納める櫃には「承久以来古文書」と書かれています。

※承久・・・1219年～

編集後記

有っても無くても悩まされるもののひとつに「雪」があります。今年は、マキノの山間部で通常生活が困難になるほどの大雪に見舞われた一方で、朽木では雪不足がスキー場の営業に大きな影響を及ぼしました。有ってほしい所にはなくて、無くてもよい所には要らないほどあるとは何とももどかしいものです。冬季五輪の会場であるバンクーバーにも通ずるものがありますね。自然を舞台とする冬の祭典は、雪を運び入れる異常事態。環境を主要テーマに掲げる大会にとっては皮肉とも言える光景です。しかしそれは、「地球の微熱」の深刻さを改めて訴えかけているようにも見えます。

（広報担当〇）